

「劇の脚本を用いた中国語インテンシブⅡ」について

人文学部

橋谷 英子

1 対象クラスについて

人文学部1年26名（男9名、女15名 うち再履生1名 放棄者 1名）のクラス。前期「中国語インテンシブⅠ」では、木村秀樹ほか著『現代漢語基礎』（白帝社）をテキストに使用。11月中旬にこの教科書を終え、基本文法を一応学んだところでの、総まとめとして、沈虹光の脚本『同船過渡』をテキストとした。

この段階では、ピンイン（発音記号）、分かち書き、の教科書文章から離れ、生の中国語の文章に慣れることが、第一の課題になる。

学生は、予習するときに、まず文の構造を考え、単語でくぎり、発音を調べてから、意味を調べる、という手順が必要になる。

コピーを使用したか、学生は、テキストをノートに書き写してくる者が半数、あるいはテキストをノートに貼りつけて、必要事項を書き込む者もいた。漫然と、配布されたプリントをそのまま持参する者もいる。

テキストには、汪曾祺『黄油烙餅』、林海音『城南旧事』などの小説を用いたこともあるが、話劇脚本のほうが、暗誦させて、会話練習もしやすいのと、最後の劇の上演が共同作業になり、学生間の交流を増進する役にも立つので、最近はおもっぱら脚本を使用している。

授業の進め方としては、最初に、学習部分の上演ビデオを見て、内容を確認してから読解に入る。今年度は、特に中国人講師とチューターによる発音チェックを、毎回行った。

最初の一ヶ月は、生の教材に慣れるために、もっぱらゆっくり読解する。少しずつ速度を上げて、年明けには、三つの部分を選び、抽選によって、グループ、配役を決定。劇のためのグループ練習の期間は約二週間。（教科書『現代漢語基礎』の復習も平行して行い、文法事項の復習小テストを別途実施）

最終授業日にグループごとにスタジオで発表した。（雪のため、2名の学生が登校できず、一週間後に2グループは再試験を実施）「雑誌」などの小道具を用意してくるグループもあった。

2 沈虹光『同船過渡』（1994作）について

沈虹光は、1948年生れ。中国湖北省武漢の女流劇作家。

80年代、文革後の改革開放時期の長江中流域の大都市武漢の逼迫した住宅事情を反映したこの作品は、日本でも98年東演などにより、上演されている。

主要登場人物は5名、退職した独身の女元小学教師、方老師と新婚夫婦、役所幹部候補の劉強と米玲の新婚夫婦、米玲の元恋人で、個人で商売をする雷子、偽求婚広告を見て訪ねてくる長江往来船の高船長である。

方先生と若夫婦は、本来は一大家族用に設計されたマンションを共用しているが、方先生と米玲は、生活態度などを巡って、争いが絶えない。若夫婦は、方先生をマンションから追い出そうと、彼女の求婚広告を勝手に雑誌に投稿する。

米玲は、個人商売を始めた雷子と別れ、大卒で幹部候補の役人劉強と結婚したが、夫はまだ下っ端で、給料は安く、上役にこき使われている。捨てた元恋人の雷子に商売を手伝ってくれと頼まれて、こづかい稼ぎに雷子に卸してもらったズボンを売り、小金が入るようになる。

妻に先立たれ、息子も独立した高船長が、件の広告を見て、方先生を訪ねる。

3 効果と反省

週4回顔を合わせながら、なかなかクラスとしてまとまらない学生たちの交流を促す。最初は共同作業を渋っていた学生も、最後は、積極的にグループ練習に取り組むようになった。

かなり難しい文も混じるため、暗誦に気を取られ、発音が疎かになる。文法事項を十分に理解しないまま、棒暗記する学生もいた。

学生の吸収力、伸び代は、教師の予想を超えるものがあるが、もちろん限度もある。学生の能力の見計らいが難しい。

最後に、学生たちが暗誦した部分の日本語訳を参考までに載せる。

（帰宅して、部屋の前で、ドアの鍵を開けようとしている高船長を見咎めて）

米：ちょっと、なにをしているんです？

高：いや、ちょっとこのドアを開けようと思って……

米：あなたのお宅ですか？

高：いいえ。

米：じゃあ、なにをなさってるんですか？
高：訪ね人で……
米：どなたを？
高：方さん、方静嫻さんです。
米：ああ、そうですか。(突然、状況を理解して)
まあ、まあ、わかりました、すぐお通しします。あ、あの、方先生、お客さまですよ、お爺さん、どうぞお入りください。
方：先ほど、外でお話しになっていらっしゃった方、ですか？
高：はい。
米：こちらが方先生です。
高：方先生、今日は。
方：今日は。今日は。
高：お初にお目にかかります。方さんがお好きなものがわかりませんでしたので、これを(花束を差し出す)
米：まあ、なんて素敵なお花、これを方先生に差し上げるのですね？
高：はい。
米：方先生、ほら、なんてきれいなんでしょう。花瓶を持ってきますね。
方：私たち、あの、どこかでお目にかかりましたか？
高：いえ、いえ、ありませんよ。でも、方さんは穏やかで優しく、なんだか一目でとても親しみを感じます。
方：まあ、ありがとうございます。あの、まだお名前をうかがっていませんか？
高：高と申します。
方：高さん？まあ、さっき私は「庖丁」って聞いて、てっきり庖丁売りかと思いましたよ。
高：もし庖丁売りだったら、玄関を開けちゃいけませんよ。
方：はいはい、わかっています。
高：方さんはご退職なさってから何年にもおなりなのですね？
方：確かに。
高：私も退職しました、でもまだ船には乗っていますかね。
方：まあ、高さんは船でお仕事なさっていたのですか。
米：素敵。うちの方先生は船を見るのがお好きで、いつもそのベランダから船をみていらっしゃるんですよ。
方：高さん、私をお訪ね下さったのは、どんなご用件かまだうかがっていませんか？
高：方さん、このことについては、実は、おわかりだと……。
方：わかっている？え、なんでしょう？
米：花を生けましょう。まあきれいな、どこに置きましょうか？方先生、ここでいいかしら？(テーブルの習字の紙を落とす)

高：おっと……。
方：私が拾いますよ。
高：いやいや、私が。(丁寧に拾い上げて、書かれた毛筆の字に気がついて)ほう、方先生は立派な字を書かれる。
方：高さん、御冗談を、ただの手慰みです。歳をとると、頭もどんどん衰えますから、昔覚えた詩や文を思い出しては暗誦して、書いてみているんです。頭の訓練ですよ。
高：なるほど、なるほど。方先生、これは——
米：方先生、詩をお書きになったのね。
方：唐詩の「春江、花月の夜」です。(注：作者は張若虚)
米：とっても長いね。
方：「白雲一片、去りて悠々 青楓浦上に愁えに勝えず 誰家か今夜扁舟の子、何処か相思の、明月の楼？」
高：いいぞ、いいぞ。
方：36句252字。一字もぬかさず暗誦できます。5.6歳の時に父に習ったものなんですよ。
米：方先生は記憶力がいいんです。
方：いいえ、もうすっかりぼけてしまいましたよ。
高：方さんは呆けてなんかいません！方さんは、とても有意義にお過ごしだ、こういうのがいいんです。私はこういう女性が好きです。
方：あの、さっき、高さんのお話、まだ終わっていませんでしたよね、訪ねて来られたご用件は何とおっしゃいましたっけ？まあ、おかけになって。
高：あの、どうも申し上げにくいんですが。
方：まあ、こちらのご老人は、何が話しにくいのですか？
米：方先生はさっぱりした方ですから、どうぞ、おっしゃいなさいな。
方：私ってせっかちなんですよ、さあ、早く。
高：(雑誌を取り出す)これ、方さんが出されたこの広告を見たんです——
方：私が広告を出す？まさか、化粧クリームでもあるまいし、何の広告を出すんですか？
米：(あわてて雑誌を受け取り)あら『愛心』、この雑誌、結構いいですよ。この前、この雑誌で、老人の恋愛についての文を読みましたが、本当に感動しましたよ。方先生もごらんになったことありません？実は老人の恋愛は、若者よりもっと感動的なんです。ただ、老人の中には伝統的思考に阻まれてなかなか一歩が踏み出せない人がいるようですけど。
方：米玲、あなた、用事があるの。
米：いいえ、ありません。
方：用事が無いなら引っこんでいて。高さんは私のお客様ですから、私がお相手します。おかまいなく。
米：じゃあ、どうぞ、お好きなように、ごゆっくりな

さってください。(米玲退場)
高：お嬢さんですか？
方：幸い、こんな娘はおりません。

高：いや、広告には「一生独身」、とお書きになっていたの。